

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 126 号

2020年 12月

キクガシラコウモリが棲みつく

コウモリが自宅に棲みついてお困りの方もおみえではないでしょうか。その場合、対象となるコウモリはアブラコウモリ（別名イエコウモリ）で、福田勝さんも本誌37号（1998年）にアブラコウモリの追い出し作戦を報告されています。ところが、熊野市にある私の実家では、キクガシラコウモリが棲みついてしまいました。コウモリが納屋に棲みつきたしたのは10年以上前からで、コウモリ特有の黒い糞が床にたくさん落ちていました。やはり汚いので、網を張ったり、獣脅しの赤いライトを置いたり、はては「ハエ取り紙」を吊したりしましたが、効果はありませんでした。糞のサイズが大きかったので、たぶん大型のキクガシラとは思っていましたが、実際に姿をみることはありませんでした。ところが、事情があり空き家となってふた月ほど経った11月に帰省してみると、1匹のキクガシラコウモリがハエ取り紙を避けてぶら下がっていました（写真）。今までは人前に姿を現すことがなかったのに、家が無人となったことを敏感に察知して安心したのでしょうか。せっかくの機会ですので、捕獲して（鳥獣捕獲許可取得）雌雄のチェックと体重をはかり、上腕部にアルミ製のバンドをつけて放しました。オスで体重27g、バンドにはコード（HACO596）が刻印されていますので、今後は捕獲するたびに成長や寿命を知ることができます。そうすると、ここでいつまでも長生きしてね、というやさしい気持ちになるから不思議です。

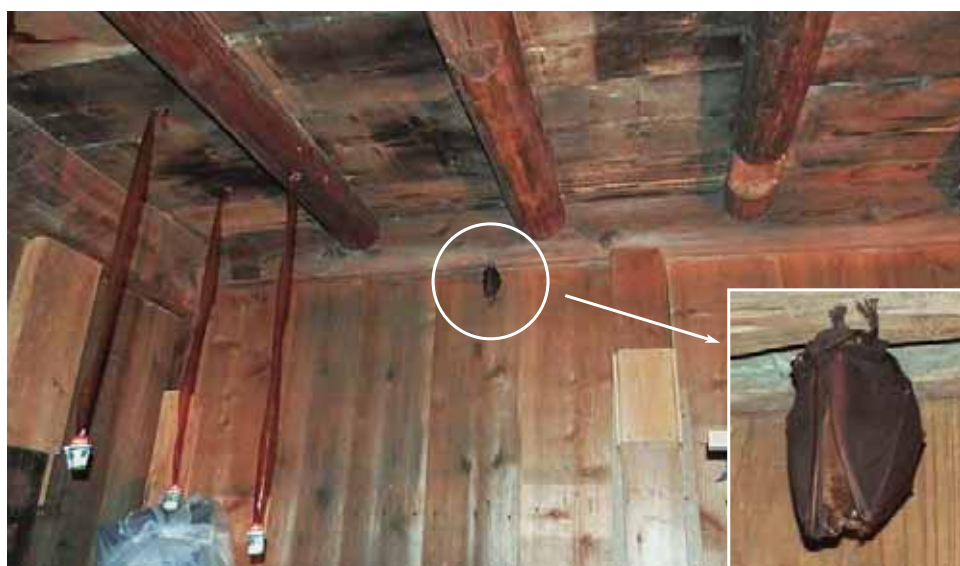


写真 ハエ取り紙をさけるようにして休息するキクガシラコウモリ（2020年11月14日，熊野市紀和町大栗須）

（清水善吉：松阪市日丘町 1386 - 17）

熊襲襲来

中 西 元 男

クロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* は、日本のはるか南、インド、アジア大陸南部などに生息していたシジミチョウの1種である(写真1)。しかし近年では分布が北上して、夏～秋期毎年のように西南日本太平洋側に飛来、発生するようになっている。本種のホスト植物は、蝶類としては珍しく裸子植物のソテツで、日本本土ではこの植物は寺院に植栽されることが多いので、発生調査方法としてはお寺巡りが効率よい。また幼虫は密集してソテツの葉を食害(写真2)、ハデな食痕を残すため既に蝶の姿がみられなくなってからでも発生の有無追跡は可能である、今のところ本土気候下での越冬は不可能、寒気到来とともに死滅すると考えられる。日本の生態系に南から侵入を繰り返す渡来種であるところから、蝶屋の間ではその和名3文字をとって、記紀神話で九州南部を本拠としヤマト朝廷に反抗した“クマソ”，その飛来発生を“熊襲襲来”と称して各地で追跡調査が行われている。

2006年まで沖縄八重山でのみ偶発的に記録されていたものが、2007年初めて九州本土から関西地方まで広く発生、本土進入2年目に当たる2008年にはその波が東海地方に及び、三重県でも初めて発生が確認された。この年の発生は以後の全国的な動向からみても大規模なもので、三重県では県北の桑名市から報告されたのをきっかけに全県的に広く発生、個体数も多かった。この年から2019年まで年々の発生状況については、四日市市の河本 実さんがまとめた表が筆者の手許に届けられており、それを基にこの蝶の三重県における動向を紹介すると共に、今後の調査への協力をお願いしたい。

2008年は北～中南勢で桑名、四日市、鈴鹿、亀山、名張、津、松阪の7市、それ以南では大紀町、鳥羽市と熊野灘沿岸は紀北町を除く尾鷲市以南、熊野市、御浜町、紀宝町の全域から記録され、とくに発生が多かったのは津市であった。発見順が北勢からなので侵入経過の追跡は困難。いきなり県北に飛来発生したのか、南から順進した動向を見逃していたかは今となっては解明不可能である。しかし、以後の年の発生経過をみると、南から順進した場合の最北到達地はおおむね津市止まりであることから、この年は北勢地域への直接的な飛来侵入があった可能性が高い。

2009年の発生は前年に及ばず、北限は津市、中勢各市は記録がなく鳥羽市と熊野灘沿岸熊野市、御浜町の4市町に留まった。県南に侵入発生したものが津市まで薄く飛散した状況と考えられる。

2010年はさらに発生規模が縮小、熊野市1市の記録に留まった。熊野市切立の大雲寺はいつも秋期に新芽若葉が豊富な好条件のソテツがあり、県内本種発生のチェックポイントとして重要な地点になっている。

2011年も熊野市のみ、他地への普及はなかった。

2012年は発生せず。



写真1 クロマダラソテツ. 鳥羽市桃取町, 2020年10月11日



写真2 食害されたソテツ. 大紀町錦, 2020年9月13日

2013年も熊野市、紀宝町と大紀町の3市町の記録に留まった。

2014年～2016年は発生せず。2010年からここまでは本種にとって雌伏低迷期とみられる。

2017年には久しぶりに2008年を彷彿とさせる規模の発生となり、最北の鈴鹿市から津市、松阪市、明和町、伊勢市、南伊勢町、鳥羽市で記録された。この年の発生は最初の発見及び特に多かった場所が津市で、しかも事後の調査で熊野灘沿岸地域からは直接の確認記録も、発生兆候痕跡すらもみられなかったことが顕著な特徴である。すなわち県南から順進したのでなく最初の県内飛来侵入が直接伊勢湾岸に到達した例として注目され、津市以南の記録はここを起点とした二次的拡散の可能性が高い。

2018年は志摩市が最北、大紀町と熊野市、御浜町4市町から記録された。県南から順進した拡散発生が志摩半島南岸までしか及ばなかったものと思われる。

2019年の発生は、2008年の大発生に次ぐ規模で、津市以南松阪市、明和町、伊勢市、南伊勢町、大紀町、鳥羽市、志摩市、尾鷲市、熊野市、紀宝町という既知記録地で御浜町を除く全市町から記録された。北限が津市より北に及ばなかったこと、記録市町村数で2008年の14に2及ばない12であったのを別にすれば、得られた個体数も多く大規模な発生状況と考えられる。この年は南伊勢町と志摩市で特に多く、この地域が発生の中心地と思われる。恐らく飛来の第一世代が志摩半島南岸に到達、半島で増殖した世代が伊勢湾岸に回り込み松阪市～津市に至ったのであろう。県南からの順進があったとしても、県中部展開の主力は直接志摩半島南岸への飛来個体群由来と考えるのが妥当と思われる。

2020年の動向については現在取りまとめ中であるが、8月中旬紀宝町での発生を皮切りに、熊野灘沿岸各地、志摩半島、鳥羽市離島部などに多く、松阪市では市中の寺々での発生が確認されているが以北、津市への拡散は鈍いように思われる。分布拡大するこの蝶の最大の武器といえる成長期間の短さ、卵～成虫までのスピードは気温の低下とともに著しく鈍化し、10月20日頃採集の幼虫はほどなく蛹化したものの2週間ばかり羽化の兆候をみせない。おそらく南から順進、津市止まりのパターンで終息するものと思われる。

追記：あにはからんや、11月に入って津市以北北勢地域から多数の発生地がみつかった。しかもそれらは産みだての卵など発生初期ステージであったり、10月下旬ソテツの新芽も発生兆候もみられなかった場所で大発生したりという状況である。例年になく暖かい11月の陽気で、ソテツが遅くまで新芽を伸ばし、それに晩期羽化の成虫がとりついて北へ勢力を拡大したものと思われる。結局、2020年の三重県の発生は2008年を上回る、過去最大規模になりそうな勢いである。

使い勝手のよい表を作成され、年々の調査で協力いただいている河本 実氏に感謝する。

(なかにし もとお：松阪市新町5-959)

わが家にニホンジネズミ

海岸近くで百姓をしているわが家にはネズミのエサがふんだんにあるとみえて、連日その気配を感じている。昨秋、勝手口で鼻先の長いネズミの死体を見つけた(写真1)。連日連夜、屋外に飛び出していく飼い猫が運んできたものと思われる。よく見かける同サイズのハツカネズミとは明らかに異なる。清水善吉氏に問い合わせると、平地で見つかつて、歯の先が白ければ、ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi*だと教えていただいた。初見である。同定していただいた清水氏に感謝する。

記録：トガリネズミ目トガリネズミ科ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi*：津市河芸町中別保(環境省3次メッシュコード5236-1443)、1個体、26-X。2019、篠木撮影。



写真1 ニホンジネズミ。歯の先端はトガリネズミのように赤くない

(篠木善重：津市河芸町中別保2230-1)

吉崎海岸に流れ着いたオオサンショウウオ

清水 善吉・田村 香里

三重県の海岸には大量のゴミが漂着します。伊勢湾内には反時計まわりの潮流がありますので、県内分にとどまらず岐阜・愛知両県の川からのゴミも含まれます。とくに、鳥羽市答志島の奈佐の浜は、湾口で受け口のようにになっているため大量のゴミが漂着することで有名です。もちろん、こんなことで名をはせてもまったく嬉しくないわけで、官民共同で「22世紀 奈佐の浜プロジェクト」を立ち上げてゴミゼロを目指した取り組みを進めています。

ゴミの大半はペットボトルなどのプラスチック系のものですが、ときに動物の死骸が漂着することもあります。アカウミガメやスナメリ、珍しいところではオオサンショウウオなどです。前の2種は海に棲んでいますので、死亡した個体が浜に打ち上げられるのでしょう。一方、オオサンショウウオは川に棲んでいますので、死亡後に流されて伊勢湾に入ったということになります。生きていれば流されないのかと疑問をもった方もいるかと思います。もちろん流されることはありますが、両生類です。陸上にあがるのが可能で、生きていれば途中で避難するため海まで流されることはありません。

オオサンショウウオの漂着は、過去に一度だけ2002年7月に津市河芸町上野の芦原海岸で記録があります(若林2002; 三重の生きもののだよりNo.15, 清水2003; 本誌No.56)。今回2例目となる本種の漂着が確認されたので記録しておきます。

オオサンショウウオの漂着が発見されたのは四日市市楠町吉崎の吉崎海岸、2020年7月9日のことです。近くに住む河北勉さんが散歩中に波打ち際から数mの高さのところで死体を発見され、ウミガメネットワーク三重会長の米川弥寿代さんを通じて三重県総合博物館に連絡があり、死体を届けてく

れました。後日(7月15日)現地をみましたが、浜にはおびただしいゴミがうちあがっていました(写真1)。

オオサンショウウオは博物館で冷凍保存されていますが、7月にしては腐敗もそれほどすすんでおらず、死後せいぜい1~2週間と思われます(写真2)。計測したところ、全長69cm、体重2070gで標準的な体型でしたので、衰弱死したわけではなさそうです。では、死因はどこにあるのでしょうか。注目したのが口内に刺さったままの針とそこから伸びる70cmほどの糸です。ウナギのツケバリにかかってしまい、糸を途中から切って放されたのでしょうか。針と糸が捕食の邪魔になって死亡したとも考えられますが、その場合には痩せているはずですが、上述のように生前の健康状態は良好であったと思われます。

そうすると、漁業者が殺した可能性も考えられ、いっきに文化財保護法違反の事件となってきます。どれだけ大事件なのかピンとこない方も多いかもしれませんが、オオサンショウウオは特別天然記念物、いわば国宝です。わかりやすく例えれば、高田本山専修寺(国宝)に火を放ったようなものですが、訴える人がいけませんのでこの死が事件化されることはないでしょう。



写真1 オオサンショウウオの漂着地点付近の環境。ここにも大量のゴミが漂着しており、岐阜・愛知限定販売という「岐阜タンメン」の容器も。赤丸が死体発見地点。



写真2 漂着したオオサンショウウオ。口内に針がささって糸が出ているが、痩せてはいない。

本件に関して若干の推理は可能です。まず現場です。伊勢湾に流れ込む河川でオオサンショウウオが生息するのは長良川、木曽川、庄内川の三川です。この流域のどこかでということになりますが、殺されたと仮定すると、漁業者とサカナを巡って軋轢のある河川ということになります。庄内川水系では遊漁は盛んでありませんし、そもそもオオサンショウウオ自体が珍しく、ツケバリにかかったらニュースになりそうです。そうすると、長良川か木曽川のどちらかとなりますが、これ以上を推測する材料はありません。なお、マイクロチップによる個体登録はされていませんでした。

ウナギのツケバリにはオオサンショウウオもかかります。大抵の人は、糸を切って放すようですが、その状態におかれたオオサンショウウオへの影響はわかっていません。常識的に考えて、針が刺さって糸が口から出ていたら良いことはないでしょう。今回のケースのように口に針がある場合は、釣道具屋で購入できる「針外し」で簡単にとれますし、道具がなくてもペットボトルのようにものを口にかまして手で外すこともできます。問題は針を飲み込んでしまった場合ですが、これはどうしようもありません。胃に針があって、そこから糸が口まで伸びていて健康な状態を保てるものなのか、大いに興味があるところで、機会があったら飼育観察してみたいと考えています。

最後に、貴重な情報と標本を提供された河北さんと米川さんにお礼申し上げます。

(しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17・たむら かおり：三重県総合博物館)

水浴に来たカワラヒワの群

今 堀 聖 史

わが家の狭い庭に直径1 mほどのメダカ池があり、水を循環させて長さ2 mほどの流れを作っています。この流れに時おり小鳥がやってきて水を飲んだり、水浴したりします。鳥たちが来てくれるとガラス戸越しにその様子を見ていますが、小雨の降り始めはよく水浴にきます。秋から冬はカワラヒワの群がときどき来てにぎやかに水浴していきます。用心深いカワラヒワは、カーテンのすき間からカメラのレンズを向けるとサッと飛立って電線に止まり、こちらの様子を見ているのでなかなか写せません。

11月25日、朝の晴天から曇空になった昼前、「キリッキリッ」という鳴声で見上げると家の真上にある高圧送電線に50～60羽のカワラヒワの群がいました。「水浴に来るかも」と家に入ってカメラを準備し、ガラス戸の下半分を段ボールで覆って待つこと5分、1羽のカワラヒワが庭に降り立ち、1分経たないうちに次々と降りてきました。狭い水辺に20羽ほど数えられた時があり、群の個体すべてが入れ替わり立ち代わり素早く水浴したようです(写真1)。5分ほど経った頃にシジュウカラが来て(写真2)、さらにスズメも来て久しぶりににぎやかな場면을堪能しました。

その先週には1羽のジョウビタキのメスがゆっくり水浴し(写真3)、その数日前は初顔のイソヒヨドリのメスがやってきました。庭にある小さな水の流れが小鳥の気に入っているようです。雨の少ない季節は小鳥にとって水場が大切なのでしょう。植木鉢の受け皿や浅いプラスチックの箱に深さ1～2 cmの水場を作って、自宅でバードウォッチングを楽しんでみてはいかがでしょうか。



写真1 賑やかに水浴びをするカワラヒワ(11月25日)



写真2 シジュウカラも元気に水浴(11月25日)



写真3 ジョウビタキも参加(11月20日)

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

コハクオナジマイマイが分布を拡大する要因は？

中 野 環

本誌125号（2020年）に中優さんが「コハクオナジマイマイの分布拡大に関する仮説」という興味深い報告をされています。私も三重県でコハクオナジマイマイを採集していたのですが、整理が間に合わず、みえ生物誌には掲載できませんでした。

コロナ禍であることから、調査に出たいという気持ちを抑え、家の奥で眠っている標本を整理してコハクオナジマイマイのデータ2点を確認しました。また、昆虫少年とカワラハンミョウを探しているときにも玉城町で生息を確認しました。3点の僅かなデータですが、コハクオナジマイマイが分布を拡大する要因を探る何らかの参考になればと考え報告します。

私が確認しているコハクオナジマイマイの生息情報は次の3点です。

1. 1998年1月3日 多気郡多気町西山 佐奈川沿いの草むら
2. 2005年7月25日 津市片田井戸町 排水路
3. 2020年9月11日 度会郡玉城町昼田 水辺の楽校



写真1. 水辺の楽校。玉城町昼田，2020年9月11日。



写真2. コンクリート水路壁や階段に付着するコハクオナジマイマイ（黄色枠内）。



写真3. 水辺を匍匐するコハクオナジマイマイ。

多気町西山のデータは、三重県における最も古い記録とされます。残念ながら当時の生息地の写真は撮影していませんが、櫛田川支流の佐奈川沿いの草むらで見つけました。この付近には、1995年に操業を開始したシャープディスプレイテクノロジー株式会社三重工場があり、操業前後に、丘陵を開発して駐車場や商用施設が整備されました。また、県道13号伊勢多気線の道路を拡幅するために、国道42号線との合流点を仁田交差点から仁田北交差点に変更する工事が行われました。

津市片田井戸町では、水田や畑地にあるコンクリート製排水路の継ぎ目にできた隙間で確認しました。中さんのいわれる太陽光パネルの設置や整地用の埋め戻し材の持ち込みはありませんが、付近には団地や津市西部クリーンセンターなどが建設され、環境が大きく改変された地域です。

玉城町昼田では、玉城町と国土交通省三重河川国道事務所が2019年に整備した『水辺の楽校』で見つけました（写真1～3）。散策路や芝生広場には、他所から持ち込まれた整地用石材が使用されています。本種が確認できたのは、整備されたコンクリート製の水路壁や階段のみで、宮川左岸堤防を走る県道38号線脇のクズが生える場所や付近の竹林では確認できませんでした。宮川上流域から流れ着いた個体の可能性も否定できないと考えます。

今回報告した3地点には太陽光パネルの設置はみられませんが、造成などの改変が行われたり、水辺に近い場所です。現時点でコハクオナジマイマイが各地で分布を広げる要因を断定することはできませんが、引き続き生息記録を残して分布拡大の要因を突き止めたいと思います。

（なかの たまき：度会町大野木1711-1）

県指定希少野生動植物種の保護増殖について

河 北 均

希少野生動植物種について、国は絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）、都道府県は自然環境保全条例等で指定しています。一般的には指定すれば解決みたいな風潮がありますが、行政は指定した瞬間に解除について進めなければなりません。一見矛盾しているように聞こえますが、じつは矛盾していません。希少野生動植物種は絶滅リスクをさけるために指定するのであって、希少でなくなって絶滅の恐れがなくなるまで個体数を回復させなければなりません。行政や自然保護団体は指定して数を増やすのが実績だと勘違いしているようですが、それは間違っています。絶滅危惧種を増やすことが目的ではありません。希少野生動植物種を指定したら、絶滅危惧種を減らすのが実績です。繰り返し述べますが、指定したら希少種から普通種になるように行政は努力しなければなりません。それが指定して採集禁止等の法的制約をかけるものの責務です。これを怠ると何のために採集禁止にしたのかわからなくなります。本末転倒です。

環境省はまがりなりにも保護増殖事業を行っています。希少野生動植物種356種のうち、哺乳類5種、鳥類15種、両生類1種、淡水魚類4種、昆虫類10種、陸貝14種、植物16種の計65種については、生息地保全とともに人工飼育して野生復帰させるために保護増殖を図っています。トキの事例は有名です。昆虫の実例をあげると、ツシマウラボシシジミが対馬市のほか生息区域外の長崎バイオパーク（西海市）、足立区生物園（東京）で人工飼育を行っています。野生復帰させるため生息区域外でも人工飼育をしながら絶滅リスクをさけようとしているのです。人工繁殖は最後の策であるにもかかわらず、絶滅から守ろうと努力しているのです。

環境省は少ないながらも保護増殖事業を実施していますが、指定しただけの昆虫の現状の実例をあげます。カワラハンミョウは津市白塚海岸と明和町大淀海岸に生息していましたが、大淀海岸の個体群は絶滅したようです。大淀海岸の個体群は指定後の2007年に発見されましたが、この数年は全く確認できていません。なお、同地の個体群は論文等では報告されておらず、科学的データが残らないまま絶滅したわけです。その絶滅要因が、自然災害か堤防工事か検証すらされず、現状維持のまま指を



写真 カワラハンミョウ

くわえて放置したことは無為無策だったと言わざるをえないのではないのでしょうか。何度も繰り返し述べますが、指定して採集制限等法的制約をかける以上、当然管理責任が生じるはずです。

白塚海岸でも堤防工事が計画されていることから、大淀海岸の二の舞にならぬように日本甲虫学会、三重昆虫談話会、白塚の浜を愛する会などとともに本会も質問・要望書を提出し県から回答がきましたが、積極的な実現性の高い保護対策は示されていません（本誌No.125）。堤防工事等があるときだけ現状をどう維持するかという消極的なことしか考えていません。つまり、問題が生じたときだけ対処する（本誌No.125）。それも県民から指摘されなければスルーするという姿勢はいかかなものなのでしょうか。

いずれにせよ、希少野生動植物種について、三重県では簡単な保護指針は策定されていますが、実効性のある保護管理計画は策定していません。生息環境を整備し、分布拡大、個体数増を目指すのが本来です。生息地の拡大にあわせて保護増殖事業をしなければ絶滅リスクは大きくなります。カワラハンミョウについてもこのままでは国の対応策が遅れたオガサワラシジミ（絶滅）の二の舞になるかと思います。一刻も早く各種の検討委員会をつくり、保護管理計画を策定し、実施するべきでしょう。カワラハンミョウは最後の手段の保護増殖事業を検討すべき時期、危機的な状況にきているといっているでしょう。

（かわきた ひとし：伊勢市岡本1丁目17-18）

鈴鹿青少年の森湿地管理，いろいろ試行中

毎冬，湿地維持のために除草作業を行っています。湿地状態を持続させることで，湿地植物の多様性を確保することを目的としています。そのなかで，いろいろな試みも行っています。前回（2020年1月31日）の作業時には，一部手をつけない区画を設けてみました（写真）。域内では土壌の湿潤度が高く，モウセンゴケ類やミミカキグサ類などの背丈の低い湿地植物が生育する場所です。9月に行われた観察会時に調べたところ，その区画にもシラタマホシクサが繁茂し，一方，上述の種類は激減していました。当湿地の現況では，湿地植物はシラタマホシクサが優占するようです。一面のシラタマホシクサも見応えはありますが，整備の目的からは外れてしまいますので，次回の作業では全面刈を復活させる予定です。また，湿地と林の境にウラジロ群落が発達していますので，これらもなるべく早く除去したいと考えています。そうすることで，湿地面積の拡大とともに，湿地に流れ込む水量が増加するのではないかと目論んでいます。目論みがあたっていたら，遷移の進行速度が鈍化し，草刈作業を隔年にすることもできるのではと都合の良いように思っています。なかなか都合良くいかないのが常ですが，面白味でもあります。そもそも，毎年除草しなければ維持できない湿地植物の生育地というのは野生といえるのか，ガーデニングではないのか，若干の疑問はありますが，次回作業を下



の日時に行います。こんな場所ですが，よろしければご参加ください（参加希望の方は清水090-9262-4665までお知らせください）。

※1月26日（火）13時から（2時間程度）長靴，軍手，汚れてもよい服装で。

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

写真 左：刈り取っているのはシラタマホシクサで，右上がウラジロ群落。
右：このように刈り残したところ（看板奥）モウセンゴケ類等は減少。

事務局から

○会費納入を御願ひします。

振込用紙を同封しましたので支払い状況を確認下さい。

○三県合同フィールドワーク中止

10月10-11日（土・日）に予定していた鳥羽市答志島・菅島は台風の影響で中止となりました。来年度に実施しますのでご参加ください。

編集後記

紀の川市の粉河寺でソテツの葉が著しく喰われているのをみました。帰ってから本誌の編集をしていると，同じような写真があり，クロマダラソテツシジミの食痕であることを知りました。粉河寺は御朱印めあての参拝者でにぎわっていましたが，当然のことながらソテツには誰も目を向けていませんでした。ところで，寺にソテツが植えられているのはなぜでしょう。冬号は3月，会誌も年度内発行予定ですので，多くの投稿お待ちしております（善）。

自然誌だより126号 Mie Natural History Research Group News No.126

発行日 2020年12月16日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp